

閉鎖都市からの脱出

Ghostw0lf

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

元海兵隊所属の主人公、ジョンソンは、紛争により負傷し退官した後、民間軍事会社の顧問として、ロシア連邦ノルヴィンスク州タルコフ市のPMC（民間軍事会社）に派遣されていた。

そこで彼は大規模な戦闘に巻き込まれ、脱出不可能な閉鎖都市に閉じ込められてしまった。

果たして彼は、荒廃し、戦火渦巻くタルコフ市から脱出することが出来るのだろうか。

閉鎖都市からの脱出

第零夜

次

1

閉鎖都市からの脱出 第零夜

・・・10年前、俺はアフガニスタンに居た。

米軍海兵隊に所属していた俺は、主に前線付近で活動していた。あの忌々しい事故・・・いや、事件が起ころまでは。

あの日、俺は前線から少し離れたキャンプで、数人の同僚とともに夜間の哨戒任務に就いていた。

前線からは約50キロほど離れていたから、安全な任務のハズだった。

俺は年の近い同僚と下らない会話をしながら見回つていると、道に迷つたのだろうか、難民サイトで保護されていると思われる少年が、15メートルほど先に一人で立っていた。

当然警戒し、銃を向けながら同僚が言う。

「こんな時間にこんなところで何をしている！早く自分のキャンプに戻れ！」と。

少年が懐に手を突っ込んだ、俺たちも咄嗟に銃を構えるが、相手は子供だと思い・・・油断していた。

次の瞬間、見覚えのある、パイナップルのような球体が飛んできた。「あ、あれはッ！」

「畜生!!グレネードだ！一体どこでこんなモンをツ！」

「いいから伏せろ！吹っ飛ばされたいのか！」

3メートルほど後方で、耳をつんざく爆発音がした。

何とか伏せて損害は最小限だが、どうやら立てるのは俺だけのようだ。立てるには立てるが、普段のようには動けない。同じ任務に就いていた仲間の中には、重傷者も居る。

「あのクソガキどこに逃げやがった！ぶち殺してやる！」

あたりを見回す。爆発音を聞いたキャンプも照明を一斉に灯す。視界は歪んでいるが、アドレナリンやらなんやらで、いつもより遠くまで見えるような気さえする。

相手は地形を熟知した現地民だが、子供の脚でしかも夜、そう遠くまでは行けないはずだ。

・・・見つけた。50メートルほど先に、走る小さい人影。

「逃げられると思うなよ・・・それでも射撃訓練の成績はトップなんだよ！」

支給されたM4A1で逃げる影の脚を狙う。呼吸を合わせる。気持ちは昂っているのに、心は酷く冷静だつた。

一発目の射撃、外れ。二発目、影の脚元に着弾したように見える。驚いたのか、影が動きを止める。

三発目、恐らく次を外したら射程圏外になる。必ず当てる・・・。そして放たれた三発目の5.56×45mmNATO弾が影に命中したのか、影は崩れ落ちるように動きを止めた。

訓練を受けていない者ならまだしも、子供が受けて立ち上がるハズもない。

「ハハハ・・・ざまあみろだ・・・逃がすと・・・思つた・・・のか・・・よ・・・」

急激に視界が霞み、呼吸もままならない。どうやらグレネードの破片でひどく出血しているようだ。

沈みゆく意識の中で、遠くから軍靴の足音が聞こえたような気がした、俺の意識はそこで途絶えた。